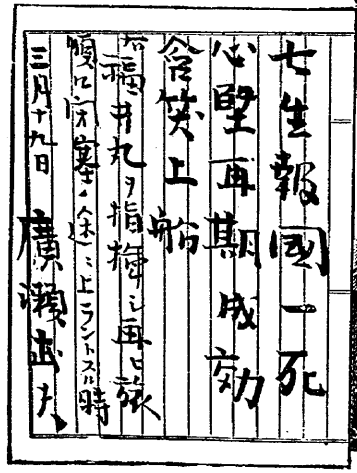
(一)廣瀬海軍中佐

二九　家郷に贈る

毎度の御懇書拝受、再三精讀罷在り候。先以て姉上様にも馨ちやんにも不相變の御壯康、大賀の外無之候。從て武夫(二)儀は例の頑健、日夜軍務に從事罷在り候間、乍憚御休神下さるべく候。毎回毎回の御手紙は、實に武夫に對する御友愛の情溢るるばかりにて、衷心感激の至りに堪へず、毎度ながらただただ感謝罷在り候。御惠贈の書藉、吳羊羹耳袋並に靴足袋確に拜受仕候。御厚情に酬ゆる辭なく、有り難く謝し奉り候。先日大島艦

(二)廣瀬勝比古、當時大島艦長たりき。

廣瀬中佐



中佐筆蹟

入港し、即夜家(三)兄御來訪下され、戰後始めて兄弟の面會、覺えず嬉し涙にくれ申候。兄上様は昨今身體壯健に渡らせられ、吳にて見し如き病後の様子更に無之、在艦の同僚等も皆左様見受候程

なれば、御安心然るべくと存候。報國丸にての働に付、兄上様には非常に悦ばれ、「武勇絶倫、先考並に山縣先師に代り、これを激賞す。」との御手紙をも戴き、武夫の滿足もこれに過ぎず候。翌朝大島は錨を拔きて出港致候處、昨夜御手紙參り候。不相變御壯健の趣、御休神下さるべく候。知己諸君よりの祝詞多く、新聞紙上にも有る事なき事書き立て、鬼などとの仇名をも付し申候などをかしくもあり、迷惑致候事も有之候。而して報國丸にて働きし眞相など、武夫より親しく聞きしなどと書き立て候も誤り多く、迷惑に感じ候點も有之候。負傷者に御見舞として、餅との御意見はさることながら、彼等には燒くなどの自由無之候間、御中止下されたく、若し思召有之候はば、武夫の姉として、見舞狀を在佐世保病院第一室藤本金太郎・武野敬治宛に御出し被下候はば幸甚の至りに堪へず候。

武夫儀はいよいよ軍功相勵み申すべく、「七生人間滅國賊」とは一貫の精神に有之候間、決して先度位の働にて滿足致す者に無之候。元來天祐を

(一) 旅順港第一回閉塞隊として廣瀬中佐の乘り込みし運送船。
(二) 重武
(三) 山縣小太郎
(四) 廣瀬中佐部下の水兵

確信し居ることに候へば、決して決して無用の御配慮下さるまじく候也。再拜。

三月二十日*　　弟　武夫

姉上様御許へ

運送船の便よくして、不自由を感じ不申候間、種種の御心遣は御無用に遊ばされたく候。時下御自愛を祈り候。（廣瀬武夫）

*明治三十七年。第一回閉塞は二月二十四日、第二回閉塞即ち廣瀬中佐の戦死せし日は三月二十七日なり。